地域文化

No.85 2008 夏 summer

特集

「伝えゆく匠の技」

―いとおしむ想い―

北安曇郡小谷村は、長野県の北西部、新潟県との境に位置し、長野県有数の豪雪地帯である。豪雪に耐えるためこの地域での茅は、通常よくみられるススキではなくカリヤス（通称：小茅）という草が主に使用されている

茅葺き職人歴 50 年の松澤敬夫さん

編集室取材

茅葺き屋根を守る

「茅葺き職人」

松澤敬夫さん・朋典さん（65歳・29歳　北安曇郡小谷村）

農村の原風景として注目を浴びる木造茅葺き住宅。しかし、トタン葺き屋根の普及で茅葺き屋根を葺ける職人は少なくなっています。茅葺き屋根の良さを残していきたいと、県内外の葺き替えに奔走する小谷村の松澤さん親子を訪ねました。

息子や今の若い人達が茅葺きの仕事に取り組んでくれるのは素直にうれしいですね。茅葺きは管理する面では大変な部分がありますが、自然に優しい素材です。古くなった茅や、屋根には適さなかった部分も肥料として土にみんな返すことができるのですから。この辺の葺き替えで使う茅は、村内の茅場から調達しています。昨年、私が収穫した茅も今年予定している葺き替えでみんな使い切ってしまうと思います。秋に収穫した茅は倉庫で乾燥させ、来春の葺き替えまで保管します。

昔の村の人はみんな自分の家で使う茅を自身で用意していました。昔の茅葺き職人は、文字通り葺く仕事だったのですが、今は材料の茅をそろえることから職人に任せられており大変です。茅場は手入れをしないと、他の草がたくさん生えてきて、取れる茅の質が落ちてしまうんですよ。

今、茅葺きの木造家屋は、文化財として注目されていますが、職人の立場からすると、実際に住んでもらいたいですね。私は小谷村で育った人間ですが、茅葺き屋根の風景をみると、あったかみというか、落ち着きを感じます。

茅

葺き職人になって五年、学校を卒業した当初は建設会社で働いていました。茅葺き職人になりたかったのですが、働きだした頃は茅葺きの需要が今よりも少なかったですね。父親の仕事も板金の割合が高く、兄貴は板金専門の職人になっています。ところが、建設会社の業況が悪くなってきて自分の仕事に不安が湧いてきました。そんな頃父親からの勧めもあり、小谷村に茅葺き職人見習いとして帰ってきたんです。

最近は茅葺き職人が少なくなりましたが、茅葺き屋根の住宅を文化財として保護する機運が高まったため、茅葺き屋根の葺き替え、修理の依頼が少しずつ増えてきました。小谷屋根でも、父親以外は私と同年代の職人修行中の者が多く、大学を出て、「誰もやっていないことをやりたい」と茅葺き職人の世界に入ってきた二十四歳の若者もいます。若い人が加わり人手は足りています。私も含めて若い連中はもっと経験を積みたいんですが肝心の現場が不足しています。茅葺きは図面では分からない部分が多く、屋根の傾斜、形状も一軒一軒異なるため、現場を多く経験したいんですよ。

いろいろな地域で茅葺き屋根を残そうと考えるなら、職人はいろいろな地域にいないとだめですね。豪雪地域、乾燥している地域、風が強い地域など、いろいろな地域の特性があり、その風土特性に合った茅葺きの仕方があるからです。

小谷村の茅葺きは雪が落ちやすいように作ります。屋根の傾斜を四十五度以上にして、角があると傷みが早いため角の出ない寄棟型で作ることが多いですね。素手で作業を行わないと、感覚が身につかないため、手はものすごく荒れて、皮も厚くなりました。建設会社時代は、綺麗な手で結構評判だったんですけどね、今はこのグローブのような手が誇りになるようにしたいと思っています。

小谷村のトタン葺きの家も、実は茅葺き屋根の上にトタンをかぶせてある家が多いんです。個人的な希望ですが、そのトタンで、昔の茅葺き屋根を保存し、将来の茅葺きにそなえてもらっている気がします。自分たちの手で、そのトタンをはがし茅の葺き替えをする日が来るのを願っています。

松澤朋典さん

2メートル以上ある、地元産の茅。これだけの長さがあるから雪にも耐えて長持ちする。短く切ると作業効率は上がるが耐久性は落ちる

収穫は11月に30人くらいで一斉に行う。刈り取りは全て手作業、スキー場と同じ急傾斜地を茅を両脇にかかえ何度も往復する

編集室取材

出版文化の一翼を担って

「製本」株式会社 渋谷文泉閣（長野市）

書籍が私たちの手許に届くまでには、原稿から編集・印刷などのさまざまな工程を経て、最終的に製本へと進む。製本は、ほとんどの作業が機械化されており、一日何万冊という書籍を作ることができるが、束見本と呼ばれる書籍の見本一冊を作る工程には、匠の掌から生み出される本の生命が息づいている。

束見本とは、それを基準として何万冊の本を製本するための原点となる本のことである。束見本の正確さと技術の高さが、製本の出来映えに結びつくため、ミリ単位での職人技が要求される。

束見本づくり職人の小林宏一さん（45歳）は、製本工程の中での数少ない手仕事に誇りを持ち、日々筆者と読者との関係を紡ぎ続けている。

「束見本づくりは、決められた本の大きさにページの枚数分の白地の紙を切ることから始めます。そして、表紙の材質や厚みなど、実際の出来上がりと同様に作成します。手で厚みを確認したり、本の臨場感を知るためですね。背表紙の丸みを出す作業が最も神経を使います。〇・五ミリ単位の仕事で、本の設計図を作るような感じです」

「この仕事を十五年やっていますが、技術はまだ完成に至っていません。ようやく自然に身体を動かすことができるようになった程度ですね。束見本が親だとすると書店に並んでいる本は子どものようなもの。子どもの成長が楽しみであると同様に、書店に行って本の中身よりも製本の出来が気になってしまいます。職業病ですね」

最高技術顧問の渋谷一男さん（60歳）は、製本が単純化されていく状況を危惧してやまない。十年程前から凝った装丁が減り、機械化しやすい単純な装丁や製本が多くなってきたそうだ。

「束見本の技術の伝承は、一朝一夕

「紙は生き物ですから、湿気によって伸びたり縮んだり、なかなか人間の言うことを聞いてくれません。それをコントロールするのが大変ですね」（小林宏一さん）

「手仕事と言うからには、やはり手から手へと伝えていかなければならないんですよ。どんなに機械化が進んだとしても手仕事の部分はなくならないと思います」（右：渋谷一男さん）お互い手仕事の大切さを知るからこその技術の伝承がある

には出来ず、最低十年はかかります。技術の伝承のために、生産とは関係ないものを練習で作ったりと、経営者とすれば無駄だと感じることもあるでしょう。でも、機械化が進んだからと言って、機械に装丁デザインを合わせて本を作っているようであれば、将来は人間が画一化してしまいます」

同社では創立三十周年記念に、装丁家のティニー・ミウラ氏を呼び「製本装丁芸術の世界」展を開催した。ヨーロッパは、本の内容はもとより装丁にも価値を見出しており、装丁に芸術を感じている。長野市で開催した展覧会に、一週間で約四千人の来場者があり、出版に対する関心の高さを肌で感じたそうだ。

「現在、ひと月に約二十冊の本を購入します。恥ずかしながら〝積ん読〟になっているものも少なくありません。自宅の倉庫に本が積まれている状況で、それらの本をゆっくり読みたいなと思うときもあります。しかし、それは将来の楽しみに残しておいて、現在は製本の新しい技術を生み出し、伝えていくことが生命線だと考えています」

「職人と名乗るからには、頭よりも手の方が器用だと自分に自信を持っていなければならない。職人だったら、頭で考えられるものは、必ず自分の手で作り出すことができるはずですよ」

自らの技術を基礎として、次世代の職人を育てる心意気を語る姿に、新たな出版文化への一歩を感じた。次に本を手にするときには、まずカバーを外して製本技術を味わってみたい。

手仕事の裏付けの上に機械化が存在する。1秒に1冊の速さで本が出来上がっていく